

このインタビュー記事は、大林監督が「ユーヨークのジャパン・サエティで開催された『アメリカ最大となる大林映画のレトロスペクティブ(2015年11月20日~12月6日)』を訪れた際に、映画ジャーナリスト岡本太陽氏によって編まれたものです。

のは日本時間の9月2日です。8月15日は、天皇陛下による玉音放送が行われた日です。日本人にとって天皇陛下は特別な存在ですからね。マッカーサーもその国民性を利用して占領政策を進めました。しかしながら現実には9月5日まで北海道はソ連と戦争していました。そういう事実を日本人は他のどの国人よりも知られています。

## 戦争は終わらない

実は原爆投下の一週間前には、父が駐留していた広島にいました。原爆では、広島の親戚も当時知っていた友人も亡くなりました。当然勝つと思っていた戦争で日本が負けたのは、僕が8才のとき。戦争という「死ぬか殺されるか」の運命の中、母と死ぬ覚悟もしました。でも敗戦となつた途端、そんな戦争を大人たちはケロと忘れていました。日本が戦争に負けるまでは、僕は完全な軍国少年でした。戦争ごっこをして遊ぶのが一番楽しくて、大人になつたらお国のために死ぬことが運命だと思っていました。そんな僕には、戦後の大人が何よりも信じられなくなりました。死ぬか殺されるからまだ大きくなるけれども、突然の平和に混乱して、きのうまで大切に扱っていた教科書のページをいきなり破いたり、墨を塗りたくつたり。でもそれは、僕だけがそうだったわけではなく、昭和10年から15年くらいまでに生まれた子どもはみんな同じなんですよ。寺山修司も僕と同世代です。彼は「命を捨てるに値する祖国がなくなった」という詩を書いています。ミッキー・カーチスも同じだな。彼も「俺と戦争と音楽と」という自伝を出して、「僕から戦争を取り上げたら、僕はいないことと同じだ」と言っていますね。

僕の中では、昭和20年で昭和は終わりました。敗戦前と敗戦後が同じ昭和であるということが、ます考えられない。日本は特殊な事情で、敗戦を歩まず、いきなり終戦という言い方になってしましましたが、戦争は本来、只では終わらないものです。そもそも8月15日は何の日でもないですよね。ボツダム宣言が受諾されたのは8月14日で、調印された

例えば「風と共に去りぬ」は戦争直前の1939年にはもう作られましたよ。しかし日本での映画が観られたのは、1952年。日本の独立後なんですよ。占領政策の中ではあの映画は観られなかった。日本人には、アメリカに奴隸制度があつたことは教えてはいけないということでね。そろやつて注意深く選ばれた映画だけが日本人に見せられて、アメリカはピーステックでフロンティアスピリットを持つ国だと浸透させられてきました。映画においても文明社会においても、戦勝国アメリカが素晴らしい、そしてそれに見習えといふことで日本は復興してきましたし、そのツケを実感しているのが僕ら世代です。

朝鮮戦争は僕たちにとっては、それはもうショックでした。ステーキなんか一生食べられないと思ったら、いきなり我が家の食卓に出たんですから。進駐軍にもうつたのかと思ったら、朝鮮戦争のせいだと。これが軍需景気を生んだのですね。早く戦争は終わつて欲しいと思つたけれど、そのお陰でステーキが食べられている。戦争に負けても殺されず、隣の国の戦争で日本は復持ちは同時代の大人にはわからないでしょ。

# 魅惑

大林宣彦 | おおばやし のぶひこ

映画作家。1938年広島県尾道市生まれ。1960年代からテレビCMの制作に携わり、2,000本以上もの作品を手掛ける。『HOUSE/ハウス』(1977年)で劇場映画にデビュー。故郷で撮影された『転校生』(1982年)、『時をかける少女』(1983年)、『さびしんぼう』(1985年)は「尾道三部作」と称され、そのリメイク版・新尾道三部作も含めて、多くの映画ファンたちに愛され続けています。また、第21回日本文芸大賞・特別賞を受賞した『日日世は好日』など、著書も多数発表している。2004年紫綬褒章、2009年旭日小綬章を受章。最新作に北海道芦別市を舞台にしたふるさと映画『野のななななか』(2014年公開)。



人生が1つの線になる

例えは古典を語らせたら名人だが、枕で寝てしまつた人たちの無念や、平和への祈りを描くことが僕の使命です。

リカ人によって作られた映画ではありますでした。夢と自由のハリウッドは、古来、國を追われ続けたユダヤ人と第二次世界大戦や、第一次大戦で國を追われてきたヨーロッパ人たちが作ったものです。アメリカはそれをうまく利用したんですね。映画を通じて理想的なアメリカの姿を世界に見せることができるから。当時フランク・キャプラがアメリカ映画の象徴でしたが、彼ですらアメリカ人ではありません。僕らが観ていたもう一つの映画を作り始めたんです。僕がファンタジーの力を用いるようになったのは、誰にも僕の想いが理解されないから。特別ファンタジーが好きだったわけではないんですよ。つまり「映画を作り始めるんです。僕がファンタジーの力を用いるようになったのは、誰にも僕の想いが理解されないから。特別ファンタジーが好きだったわけではないんですよ。つまりファンタジーが成立するには古い町で、そういう町を愛してもらおうというアプローチなんです。ファンタジーが息づく町を愛してもらえば、そこを開拓するの古い町で、古い町の良さが残るかもしれないという賭けですね。それが僕を「ふるさとまもり」の作家にしていました。

僕はたくさんハリウッド映画を観てきていましたが、当時のハリウッド映画は、実はアメリカの後ろの故郷と人をどうするかというテーマを秘めています。それが僕の映画との共通点です。無自覚な平和に燃いでいる日本の故郷ではなく、日本の古き良き暮らしの文化が失われた故郷、あるいは僕が経済戦争だと思っている高度経済成長期によつて新たに破壊という被害を受けた故郷を描くことで、傷ついた故郷を守ろうとしています。何よりやはり「みんな死んでいたのに、生き残った人間は戦争で死んでいた人たちのことを伝えなくてはいけません。だからこそ『時をかける少女』といふ少年少女の恋物語ですら、主演の原田知世の後ろには、戦争で殺された人たちの影が見え隠れするんです。故郷にかつて生きていた人たちそして無残にも命を奪わ

れてしまつた人たちの無念や、平和への祈りを描くことが僕の使命です。

僕たち世代にとって3・11は、日本が歩んでしまつた間違つた敗戦後のやり直しのチヤンスだったんですよ。8・15(終戦の日)が3・11と僕の中ではシンクロします。敗戦の日本の中で大人になった僕らは、8・15以前の日本の方方が間違いであつたということを強く意識しています。そこで3・11を機に、もう一度これから新たに再生していくたいという想いが、「こ数年の僕の映画作りには反映されています。

また、3・11があつたからこそ、これまで僕の映画でやってきた僕の意思がより明快になつてきました。寺山修二や阿久悠、立川談志など先に死んでいた仲間たちが、もしも生きいたら何をやつただろうといふ思いも僕の中にあるんです。だから、彼らがやつたであろうことも一緒にやつてやろうと考えています。

また、3・11があつたからこそ、これまで僕の映画はファンタジーだったので、甘い映画だとしか思われていなかつたのですが、映画も土地も人びとに愛され、うれしいことにそれらの映画の舞台となつた尾道はかなり破壊から免れました。『HOUSE/ハウス』ですら、実は誰にも理解されない敗戦少年のアイデンティティを秘めています。海外での映画を上映すると、必ず「あのゴ



©PSC

興する。「これはどういうことなんだ!」と。ふるさとを守る日本の復興はスクラップ・アンド・ビルトによります。実は、敗戦後もまだ日本には緑の山河が残っていたんですが、それを根こそぎ壊したのは日本人自身でした。だからますます日本人の大人が信じられなくなりますよね。こうして僕は、破壊されない故郷だけは守ろうということで、「町まるもり」映画を作り始めるんです。僕がファンタジーの力を用いるようになったのは、誰にも僕の想いが理解されないから。特別ファンタジーが好きだったわけではないんですよ。つまりファンタジーが成立するのは古い町で、そういう町を愛してもらおうというアプローチなんです。ファンタジーが息づく町を愛してもらえば、そこを開拓するの古い町で、古い町の良さが残るかもしれないという賭けですね。それが僕を「ふるさとまもり」の作家にしていました。

僕はたくさんハリウッド映画を観てきていましたが、当時のハリウッド映画は、実はアメリカの後ろの故郷と人をどうするかというテーマを秘めています。それが僕の映画との共通点です。無自覚な平和に燃いでいる日本の故郷ではなく、日本の古き良き暮らしの文化が失われた故郷、あるいは僕が経済戦争だと思っている高度経済成長期によつて新たに破壊という被害を受けた故郷を描くことで、傷ついた故郷を守ろうとしています。何よりやはり「みんな死んでいたのに、生き残った人間は戦争で死んでいた人たちのことを伝えなくてはいけません。だからこそ『時をかける少女』といふ少年少女の恋物語ですら、主演の原田知世の後ろには、戦争で殺された人たちの影が見え隠れするんです。故郷にかつて生きていた人たちそして無残にも命を奪わ



いた友人も亡くなりました。当然勝つと思っていた戦争で日本が負けたのは、僕が8才のとき。戦争という「死ぬか殺されるか」の運命の中、母と死ぬ覚悟もしました。でも敗戦となつた途端、そんな戦争を大人たちはケロと忘れていました。日本が戦争に負けるまでは、僕は完全な軍国少年でした。戦争ごっこをして遊ぶのが一番楽しくて、大人になつたらお国のために死ぬことが運命だと思っていました。そんな僕には、戦後の大人が何よりも信じられなくなりました。死ぬか殺されるからまだわかるけれども、突然の平和に混乱して、きのうまで大切に扱っていた教科書のページをいきなり破いたり、墨を塗りたくつたり。でもそれは、僕だけがそうだったわけではなく、昭和10年から15年くらいまでに生まれた子どもはみんな同じなんですよ。寺山修司も僕と同世代です。彼は「命を捨てるに値する祖國がなくなった」という詩を書いています。ミッキー・カーチスも同じだな。彼も「俺と戦争と音楽と」という自伝を出して、「僕から戦争を取り上げたら、僕はいないことと同じだ」と言っていますね。

僕の中では、昭和20年で昭和は終わりました。敗戦前と敗戦後が同じ昭和であるということが、ます考えられない。日本は特殊な事情で、敗戦を歩まず、いきなり終戦という言い方になつましたが、戦争は本来、只では終わらないものです。そもそも8月15日は何の日でもないですよね。ボツダム宣言が受諾されたのは8月14日で、調印された



僕は3才の時に自宅の蔵の中

なきやいけない。そのため今まで生き延びてきたんだろうって。  
**正気を描く**  
実は僕は正義というものが一番信じられま  
そして、また繋がる点と点  
僕は3才の時に自宅の蔵の中で映画と出  
会つて、映画館で映画を観る前に、映画を

僕は、これまでそのために生きてきましたからね。戦争中で僕たちは自肅を散々経験しています。戦争中に「戦争は嫌だ」と言つてしまつたら、国家犯罪人になってしまいますから。今だつてもし戦争が起つてしまつたら、こういう表現は結局国家犯罪人になつてしまふわけですよ。だから気にも病んで自肅される人の気持ちもよくわかります。けれど、それをやつてしまつたら、また元も子もないんですよ。

実は僕の映画にはもう7回原爆が出てきます。この事実もあまり気付かれないですよね。というのは「これは原爆だ」という明らかな書き方をしていないからなんですね。今お話ししたことは、誰にも理解されない僕たちのせめてもの抵抗でした。ところが3・11以降によく僕たちのフィロソフィーを表に出せるようになり、それが理解されたりきまること。

僕は仕事として映画作りをすると考えたことがなかった。コマーシャルですら僕は仕事をしてやつたことはない。とにかくそれが大好きで、誰かと対話できる素晴らしいものだからやつていたんです。これをやつているときっと世の中は平和になるんだと願いながらね。僕の平和への願いが一番託せるのが映画だから。

ギルド)があつたので、自主映画として『花筐』を僕の最初の35ミリフィルムの作品にすることになりました。ところが同じ時期に東宝から映画を依頼されたんです。彼らが「大林さん、『花筐』だったら東宝の監督でも映画にできます」と言うのだから、娘のアイデアで『ハウス』をやることになつたんですよ。



© 唐津映画製作推進委員会

人が増えたと1ミリでも映画を撮るようになりました。僕は1965年に初めてアメリカに来ました。そしてたくさんの僕の8ミリや16ミリフィルム作品をハリウッドで上映していただきました。そうやってすでに世界に出ていましたから、あえて日本で劇場用の映画を撮ろうとは思っていなかった。ところが僕の自主映画やコマーシャルが人気を博していたので、東宝という会社から頼まれて、「ハウス」を作るようになりました。映画会社に所属していない人間が初めて作る商業映画ですから、メジャーで活躍していた監督たちが出来ないことをやろうと

A photograph of a woman with dark hair, wearing a white long-sleeved shirt, sitting on a blue and white checkered blanket. She is holding a large slice of watermelon. In the background, there is a green field and a clear sky. A colorful umbrella is visible above her head.

せん。だから僕は政治家にも運動家にもないティティなんですよ。例えば日本の正義とアメリカの正義がぶつかったって戦争になった。そして勝った方の正義が正しかったということになる。それが戦争というもの、そんな矛盾を嫌というほど思い知らされてきましたから、結局正義といつもの己の都合でしかないんじゃないかと悟ったんです。あるいは権力を持つた者の具でしかないと。戦争という「狂気」に立ち向うには、僕たちが信じられるのは「正気」しかないんですよ。人間が本来持つ正気。これだけが頼り。



©P

示すプラカードは扱いでない。だからこそ混沌としている。けれど混沌としているものをそのまま差し出すことが芸術なんです。

話です。疑問と疑問を切実にぶつけ合う。だからあの2本の映画は、混沌としているけれども、混沌とした者同士の対話の機会になりました。

人が増えたと 1ミリでも映画を撮るようになりました。僕は 1・9・6・5 年に初めてアメリカに来ました。そしてたくさんの僕の 8 ミリや 16 ミリフィルム作品をハリウッドで上映していただきました。そうやってすでに世界に出ていましたから、あえて日本で劇場用の映画を撮ろうとは思つていなかつた。ところが僕の自主映画やコマーシャルが人気を博していくので、東宝という会社から頼まれて、『ハウス』を作ることになりました。映画会社に所属していない人間が初めて作る商業映画ですから、メジャーで活躍していた監督たちが出来ないことをやろうと思いました。ただ、僕にとってはそれが古典的なハリウッド映画だったんですよ。映画の撮影所には友人がたくさんいるんですけど、当時彼らと話していると、ジョン・フォードやハーヴード・ホークス、イングマール・ベルイマンが良いと言つて盛り上がりります。でも僕が「けれど君たちの作っているものは全然違うね」と言うと、彼らは「いや、これは仕事だから」

A woman with dark hair tied back is sitting on a blue and white checkered blanket in a grassy field. She is wearing a white long-sleeved shirt and dark pants. She is holding a large, red watermelon and appears to be eating it. A colorful umbrella is positioned behind her, providing shade. The background shows a bright, open landscape.

せん。だから僕は政治家にも運動家にもないティティなんですよ。例えば日本の正義とアメリカの正義がぶつかったって戦争になった。そして勝った方の正義が正しかったということになる。それが戦争というもの、そんな矛盾を嫌というほど思い知らされてきましたから、結局正義といつも己の都合でしかないんじゃないかと悟ったんです。あるいは権力を持つた者の具でしかないと。戦争という「狂気」に立ち向うには、僕たちが信じられるのは「正気」しかないんですよ。人間が本來持つ正気。これだけが頼り。



© NTV

日本映画の前にハリウッド映画がありました。3・11の前にアメリカでは同時多発テロの9・11がありましたね。9・11が起ったからこそアメリカ映画も随分変わり、同じように3・11があつて日本映画も変わっています。世の中は不思議なものでうまく辻褄が合います。僕は映画を「辻褄が合つた夢」と言うんですが、偶發的に起つて、いるように思える世の中のことも、なぜかきちんと辻褄が合うんですよ。昔僕は三島由紀夫に多大な影響を与えた、『檜』雄の小説『花筐はながたみ』が好きで、40年ほど前にこれを映画化したいと思い、脚本にもしていました。そのとき檜さんは、福岡の能古島にいらしゃつたので、そこに行つて檜さんに映画化の許可をいただきました。ただ、小説には物語の舞台となる場所が書かれていませんでした。しかし映画化するとなると、どこかで撮らなければならぬので、「檜さん、これはどこなんですか?」と聞きました。すると彼は「唐津に行ってごらんなさい」とおっしゃつたんですよ。そこで佐賀県にある唐津に行ってみました。小説の中に出てくる具体的なものは何もありません

ら山中恒は児童文学を、手塚治は児童漫画を選びました。戦争という狂気に抵抗で生きるのは正気だけで、芸術こそが人間の正気を表現できるんですよ。政治や宗教ですら、「我が政治が正しい」君の宗教は悪だ」と言います。それに対し芸術は、お互い違うけれども、その違いを理解し合い、許し合って共に生きていこうという活動ですよね。しかし違うものは敵であるとみなす傾向にあるのが、政治や経済や宗教です。敵は潰した方が良いですからね。つまりはナンバーワンを願えれば戦争になってしまふんですよ。でも芸術はオンライン同士の共存を願います。そこでね、先輩映画監督の黒澤明が「僕らはプラカードは担がない」と言いました。僕の映画は僕のフィロソフィーの上に作られています。

元も子も無い。そこで山中さんと、もう一度本当の「男らしさ」や「女らしさ」というものを考えてみようとしたんです。実は原作では性が入れ替わる子たちは小学生なんですよ。つまり山中さんは、まだ性を持たない子どもによって大人の男女の心理小説を展開しようと、児童文学を選んだのです。

これは手塚治虫も同じで、もし彼の漫画を小説や実写映画にしたら子供っぽくて見るに耐えないものになってしまいます。しかし児童漫画というジャンルだから、子供っぽさを盾にとつて人間の正気を描こうとしていました。実は正氣を描くということは、一段社会でよ子供っぽいことばなんですよ。ごち

話をです。疑問と疑問を切実にぶつけ合う。だからあの2本の映画は、混沌としているけれども、混沌とした者同士の対話の機会になりました。

A close-up shot of a person's hands holding a professional camera, focused on capturing a large, ornate dragon-shaped float. The float is intricately painted with vibrant colors like red, green, and gold, and features traditional Chinese characters. The background shows a clear blue sky and some buildings, indicating an outdoor event.

© 唐津映画製作推進委員会